

## 高菜における蚜虫防除とウイルス病発生について

橋口満男\*・三善重信\*

HASHIGUCHI, M. & MIYOSHI, S. On the Virus Prevention by Aphids  
Extermination in "Takana" Seed-bed

**緒言** 近時、十字科蔬菜のウイルス病の発生が甚だしく栽培に支障を来して居るが、高菜においても、その被害が多く主要産地は大打撃を蒙りつつある現状である。この症状は縮葉矮化するものの外、多くは生育中末期より漸次黄化、枯死し落葉するもので、現地においては委託育苗等を行い被害を軽減することが行われて居るが、大した効果を挙げていない様である。演者等は本病防除の一方法として、苗床期間における蚜虫防除とウイルス病発生との関係を明らかにするための試験を実施したので、その結果の概要を報告する。

**試験の方法** 1954年三池高菜を用い9月25日1区1坪宛播種し、概ね本葉2枚の時3寸×3寸に1回移植を行った。発芽後夫々9処理を行い、当场耕種規準により11月26日1区3坪3区制とし、6尺×1.5尺3条、坪12株として定植した。

**試験成績並に考察 (1) 苗床における罹病程度**

11月26日定植直前、既に苗床において発病したものの調査は、標準区、ホリドール区及び後半被覆区が比較的多かった。全期間被覆区、前半被覆区は全く発病を見ず、他の区は3~7%程度で顕著な差は認められなかった。

(2) 本圃における罹病程度 生育期間中2月24日、4月8日の2回に、罹病率及び罹病程度を調査した。

(a) 第1回調査(2月24日)調査。全期間被覆区が健全歩合最も高く、実害は認められなかった。之に反し標準区では健全歩合低く被害が甚しかった。他の区においては、BHC3日毎区は或る程度の効果があつたと認められる外、標準区に比し罹病歩合は一般

に稍低いが、夫々の間には大きな差異は認められなかった。

(b) 第2回(4月9日)調査。第1回に比し全般的に罹病率は高くなつたが、区間における傾向は略第1回と同様の結果で、全期間被覆区が最も優れ、標準区が罹病率高く、最も劣つた。他の区においては第1回同様、BHC3日毎区が比較的効果が認められる外は、顕著な差はなかつた。

(3) 収量 収量調査の結果は全期間被覆区が最も多く、反当換算900貫程度で、BHC3日毎区、ホリドール区が之れに次ぎ、他は何れも標準区と大差なく多少例外はあるが、概ねウイルス病罹病の程度の高い区収量が低い傾向がある。

以上の結果から苗床における蚜虫防除のための薬剤撒布の効果は罹病率、収量より見て、BHC3日毎区が或程度認められるが、他の区は大した期待は困難と思われる。全期間被覆区は顕著な効果がある点からみて、苗床期間に完全な蚜虫防除を行えば相当の効果があると思われる。

然し乍ら前半被覆と後半被覆との間には罹病率に大差なく、また全期間被覆区でも少しではあるが発病を見た点から、生育初期のみならず相当遅くまで感染の機会が存在するものと考えられ、苗床期間のみならず、本圃定植後も感染があるものと考えられるので、育苗中は勿論、本圃における蚜虫防除について更に検討の要があると思考される。

なおウイルス病の外、微量要素欠乏症状と思われる徴候も認められ、これ等も加わつて被害を顕著ならしめている様であるので、更に引き続き要素欠乏とも関係して試験を行う予定である。

\*福岡県農業試験場